

質問に答えて

2022年 5月

4月の講座での三上の「開講の挨拶」で、「日本の漢方では理論より経験（術）が重視されてきた話しをしたことに質問を受けました。限られた時間で、話が不十分で申し訳ございませんでした。

漢方と現代科学や中医学との比較において「術」と「学」との差があるとよく言われています。日本の伝統的なものは茶道・書道・武道など師匠の模倣から始まって、その後で発展させてきたといわれています。士農工商の身分制度に縛られ、役職も家系として受け

療からの脱皮は吉益東洞(1702-1773)の「天命論」によります。

中国・科挙 ⇔ 日本・成功報酬

- 理論が大事にされ、実用的なものは下に見られていたり、隠された。
孫思? 581-682の千金方には「傷寒論は江南の人は秘して語らず」と記載できなかったと記している
実用書である「天工開物」は日本では何度も再販された
- 吉益東洞が天命論を出す前は、陰証を治療しないのがあたりまえだった。
- 田代三喜の曲直瀬道三への涙墨紙
- 薬種隠名
- 処方分量を隠す
- 技術は言葉や文字では表現できない

中医学と漢方(術)の違い

- 中 科挙という国家試験があった 学
人材登用
- 日 世襲的身分制度⇒師弟関係
家系を大事にする
- 中 理論優先 テキスト化
- 日 術は言葉や文字では伝えられないもの
- 日 成功報酬⇒直すコツ⇒一子相伝⇒口訣
- 中 弁証施治 弁証論治
- 日 方証相對 鍵と鍵穴

科挙⇔成功報酬

- テストがあるとすれば 理論が優先
その意見を認めてもらわねばならない
⇒公表・理論武装
- 成功報酬とすれば 治療実績が優先し、秘方秘術を他人には知られたくない

継がれてきました。大切な事柄は「免許皆伝」「一子相伝」として受け継がれおおぜいに伝えるという公表の形をとりませんでした。言い方を変えれば秘密主義だったと言えます。中国でも傷寒論のような実用書は秘して伝わらなかったと「千金方」には書かれていてその後の出された「千金翼方」に傷寒論が入手出来たと書かれています。随時代頃より医療制度が整備され医師の国家試験「科挙」が成立しています。国家試験の問題を出す側としては、テキスト的な物が必要で古典によく「問うて曰く...」「答えて曰く...」となるのではないのでしょうか。それに対して日本では成功報酬で患者は中元・お歳暮にお礼を払っていたとされます。又、殿様の病気を直してご褒美に田畑を授かったなど。治療実績を上げる為には陰症を知っておくことも必要でした。陰症わ診ないようにする算術的医

孫思? 590-682

- 医王と呼ばれている
- 唐以前の医学書を集成大成した千金方を著す
その30年後に
千金翼方を著したとされている
この千金翼方には傷寒論が記載されている



日本漢方協会通信

～青空研修会に先だって～

2022年5月

理事 熊井 啓子

5月8日に予定されている青空研修会のメインは、ケシ柵内に植栽されているケシを観察できることです。当日は薬用植物園主任研究員の講義がありますが、それに先だってケシについて概略を説明させていただきます。

4月から5月にかけて路上でよく目にするナガミヒナゲシや、観賞用のヒナゲシなどは同じケシ属だが、栽培が禁止されていないケシである。

麻薬の原料であるモルヒネを含有しているケシは、日本では「あへん法」により厚生労働大臣の許可を受けずに栽培することは禁止されている。

ケシ *Papaver somniferum* L. (ソムニフェルム種) 写真①と、アツミゲシ *Papaver setigerum* DC. (セティゲルム種) 写真②の2種類である。

ソムニフェルム種は小アジア原産の越年草で高さは100～150cm、白花であへん収量の多い一貫種、淡紫色であへん採取用のトルコ種、ヨーロッパで品種改良された八重咲きの園芸種がある。

セティゲルム種のアツミゲシは北アフリカ原産の越年草で、渥美半島に帰化して大繁殖していたことからその名があり、高さ30～80cmで全体に小さい。

局方アヘンはソムニフェルム種を基原とする。

あへんの採汁は、未熟のさく果に切傷刀で傷をつけ写真③、傷口から分泌する乳液が空気に触れて黒色を帯びて凝固したものを採取する。

そこからアルカロイドを抽出・分離し、各成分を取り出す。

成分はアルカロイドのモルヒネ・コデイン・テバイン・パパベリン・ノスカピン等で、そのなかでもあへんの主成分であるモルヒネは、医療用麻薬の代表的存在で、鎮咳作用も強いが最も強力な鎮痛剤としてがん疼痛治療等に用いる。

モルヒネなどは「麻薬及び向精神薬取締法」の対象であり、管理・施用など麻薬として規制されている。

ケシ *Papaver somniferum* の生薬名は3種類あり、①生薬名がアヘン（阿片）で使用部分が乳液、②生薬名がオウゾクコク（罌粟殻）で使用部分が種子を除いた蒴果、③生薬名がオウゾクシ（罌粟子）で使用部分は種子である。

①の用途は鎮痛・鎮咳薬の製造原料で、②は“けしがら”と称し、①の用途と同じである。

漢名の罌粟は蒴果（いわゆるケシ坊主）が罌（かめ）に、種子が粟（あわ）に似ていること

からつけられた。③はあへんアルカロイドを含まない種子で、発芽防止処理された上で食用（七味唐辛子やあんぱんのトッピング）にする。

あへんの乱用は精神的身体的依存性が生じ社会問題を起こすので、栽培が禁止されているケシと禁止されていないケシを見分けるために形態的特徴を知っておく必要がある。

栽培が禁止されているケシの特徴は写真④からも解るように①葉や茎は無毛またはほとんど無毛である。②葉は無柄で、茎を抱き込んでいる。③葉の切れ込みは比較的浅い。

禁止されていないケシは葉や茎は有毛で、葉は柄があり、葉は羽状に深く切れ込む。

栽培が禁止されているセティゲルム種のアツミゲシは繁殖力が強く空き地などに野生化していることがある。まばらに小剛毛があり葉の切れ込みはギザギザになっているが、葉の付け根は茎を抱いているという特徴がある。見つけた場合は、自分で引き抜いたり切り取ったりしないで、東京都薬用植物園へ問い合わせるか、保健所へ連絡をしていただきたい。



写真① H30年5月17日



写真② H30年5月17日



写真③ H30年5月17日



写真④ H29年5月11日

日本漢方協会通信

日本漢方協会総合講座を聴講して（2022年4月17日）

会員 安倍眞知子

この4月、夏日になったと思ったら次の日は10度も気温が下がりまた上がり、春先の『三寒四温』ではと思って調べたら、もとは中国で冬の気候に使う言葉でした。日本では時効の挨拶では1~2月、一般には寒暖の周期がある2~3月頃の春先に使うとありましたが、最近の気候変動も考えれば4月でも良いのではないかと思ってしまいます。

『漢方』も言葉自体は江戸時代に『蘭方』に対して新しく作られた言葉ですが、もとは中国の医学が日本で発展したものです。古くは紀元前の前漢時代に『黄帝内経』、『神農本草経』、後漢時代では『傷寒論』、『金匱要略』が出来上がっており、それ以前の戦国時代から医学の種のような考えがあったと言われてます。先日、五島美術館（武蔵野台地が浸食された国分寺崖線に立ち、富士山が遠くに見えます。）で「中国の陶芸展」を見てそれを改めて実感しました。紀元前4世紀の戦国時代から明時代までのものが80点以上あり、その中には戦国時代の軽量道具の展示もありました。一つはビールジョッキ型、もう一つは柄杓型で両方とも素焼きでその上から黒漆がかけられていました。手で形作られ、大きさは、ジョッキ型は上の円筒の部分は直径12.1~13.5cm、下の方はややしぼまって12.5~12.2cm、高さ12.2cmで厚さが7~10mm、柄杓の方は、直径7.8cmの半円球で柄杓の取っ手の長さが、24.8cmで同じく厚さが7mm~1cm位でした。容量は？と計算してみてください。生薬を煎じる時、使うのに何だかちょうどいい感じ。と勝手に想像をしてしまいました。またそれらが、湖南省の長沙の出土品です。漢方を勉強している人にはピンときたかもしれません。「漢の長沙の守…」の文です。その頃から（戦国時代・紀元前4~3世紀）量ることが行われた事実が目の前にあったのです。また同時代の古鏡には1mm刻みの精密な造形の西王母、四神獣、黄帝や神農があり、高い技術や神仙思想が感じられました。

4月より総合講座が始まりました。三上先生が話された「日常の行動の中に見つける」のようにいつも漢方が頭にあると天候や陶磁器などから意外な接点の発見があつてワクワクしてしまいます。そこから何故だろう？ちょっと調べてみようか、講師の先生に聞いてみようか？と次に繋がって行くのです。次の講義が楽しみになっていくはずです。三上先生、小根山先生、秋葉先生、松岡先生、本日はありがとうございました。また次回、楽しみに待っております。



戦国時代・紀元前4~3世紀

左：瓦胎黒漆勺

右：瓦胎黒漆量

五島美術館所蔵（展示終了）